

●天候に左右されない秋田おぼこ米

今年度は5月の大雨に低温、6月中旬の低温、7月の高温、8月の低温・日照不足と天候不順が毎月のようにある年で、全域で平年より1割～2割減収している方が多く見られました。

主な原因は、6月の低温の影響で分けつが増えず茎数・穂数ともに不足したこと、8月の日照不足により登熟が緩慢になったことが考えられます。今年度の天候をふまえ、天候不順に対応できる基本技術を実行しましょう。

●登熟期間を確保する栽培管理を

早期の田植えは出穂が早まり、梅雨明け後の高温の影響を受け高温障害が懸念されますが、ケイ酸施用を基本とした土づくりと出穂以降の水管理の徹底で対策を講じるにより高温障害が軽減されます。

可能な限り、稚苗は5月15日～25日頃、中苗は5月20日～30日頃の田植えを基本として田植えの日は15℃を下回らない日に行うことが重要です。特に晩生種は出穂が遅れると、登熟完了前に登熟限界気温（平均気温15℃以下最低気温10℃以下）が訪れ、今年のように登熟不良で減収となってしまいます。そこで晩生種から播種を始め田植えも早めに行い、生育量と登熟期間を十分に確保します。栽培密度も極端な疎植では穂数・籾数の確保が天候によって左右されるため、平坦部では坪70株、中山間部でも坪80株を基本とし、太い有効茎を育成して安定収量を確保しましょう。

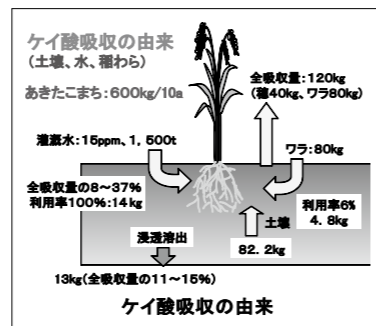
登熟には出穂後30日ほど用水が必要ですがコンバイン作業を優先するあまり、出穂後2週間ほどで完全落水している圃場が見られました。早期完全落水を行うと、根の活力低下を招き下葉枯れが進み、登熟が滞る要因になります。

排水不良田において登熟を優先する水管理を行うには、春先のサブソイラー等を使用した透水性の改善と、中干し時期の「溝切り」により排水性の向上を図り、可能な限り落水時期を遅らせ登熟を向上させます。

●ケイ酸を施肥しましょう

おぼこ管内の水田の7割はケイ酸不足となっています。稲はケイ酸植物ともいわれ、作物の中では最も多くケイ酸を吸収します。あきたこまちを10aで600kgの収量を上げるためにはケイ酸は120kg必要です。しかし右の図をみると、土壌等から補給されるケイ酸は101kgしかないため19kgのケイ酸が不足しています。不足したケイ酸は毎年、施肥により補う必要があります。

ケイ酸は今年のような気象変動の激しい年でも稲に吸収されるため、高温時でも被害を最小限に抑えることが可能です。今年度の異常気象により稲体が軟弱で倒伏した方、WCSなど圃場に稲わらが残らない場合などではケイ酸不足が考えられます。また、大豆後作など土壌チッソの発現が大きくなる圃場でもケイ酸資材の施用は必須です。



ケイ酸資材

	おぼこロマン大地		ケイ酸加里
	ケイ酸17%、リン酸3%		ケイ酸34%、カリ20%
	散布量: 40~60kg/10a		散布量: 40~60kg/10a
	ケイ酸エースを配合しているため利用率が高い、機械散布に適した300kgフレコン有 (要予約)		く溶性加里と流亡しにくいケイ酸を配合



No.7 農業技術情報

平成30年12月発行

発行: 秋田おぼこ農業協同組合 / 秋田県農業共済組合仙北支所
監修: 仙北地域振興局農林部農業振興普及課



平成30年度 総括版

●稲作生育概況 仙北地域振興局農業振興普及課水稲定点調査結果より

1. 今年度の生育経過について

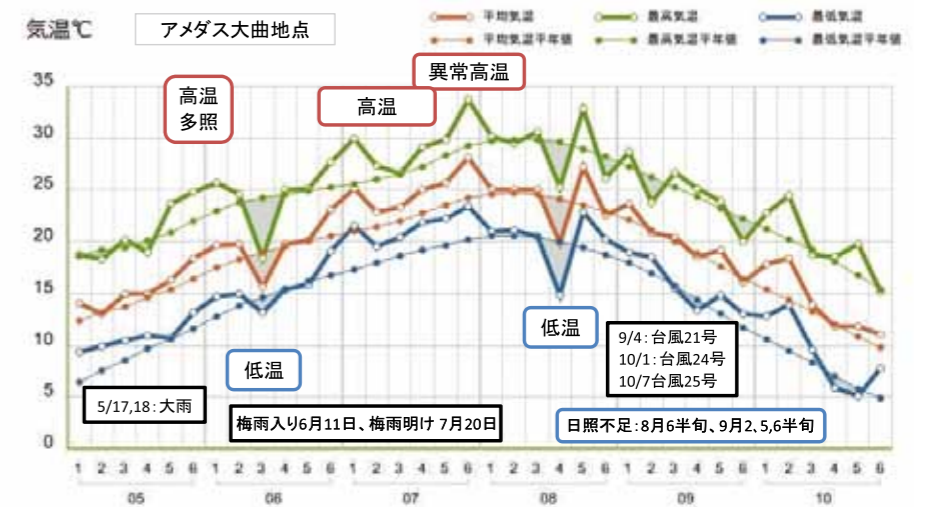
○今年度は5月17、18日の大雨や5月20日前後の低温の影響もあり田植えが早い圃場では代枯れ症状が散見されました。5月5半旬以降は気温・日照が確保されたおかげで活着は良好でした。

○6月中旬の低温により生育が抑制され、茎数不足になりました。6月下旬から7月上旬は高温寡照で経過し

軟弱徒長傾向になりました。幼穂形成期ころの生育は、草丈がやや長く、茎数は少なく、葉色は濃かったため、穂肥の判断が難しい生育相でした。

7月は異常高温もあり一部地域では水不足が懸念されました。葉緑素計値が幼形期から減分期にかけて低下したことから、高温による稲体の消耗が推察されました。

○出穂期は平年より1日早い8月3日でした。登熟は、8月4半旬の低温、9月の寡照等により緩慢でした。断続的な降雨や台風の影響もあり刈取終期は平年より4日ほど遅い10月13日でした。



2. 今年度の作柄概況について

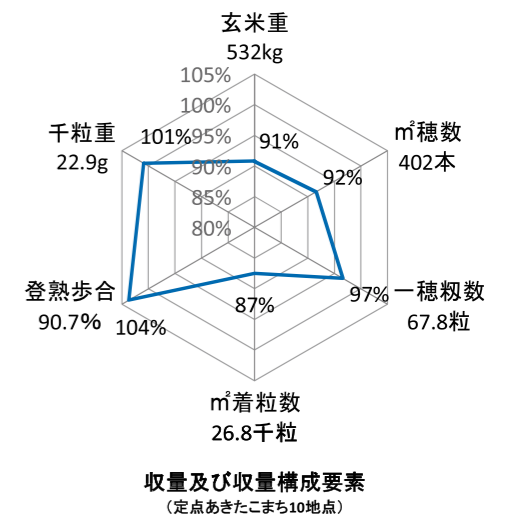
～県南地域の作況指数は「96」の「やや不良」

(東北農政局12月10日公表)～

水稲定点調査ほにおける10aあたり収量 (篩い目1.90mm) は平年よりかなり少ない532kg (平年比91%) でした。

収量構成要素を見ると㎡当たり穂数は402本 (平年比92%) と少なく、一穂籾数は67.8粒 (平年比97%) とやや少なく、㎡当たり籾数は26.8千粒 (平年比87%) とかなり少なくなっています。登熟歩合はやや高い90.7% (平年比101%) でした。

なお、12月17日現在のJA秋田おぼこの1等米比率は99.3%です。



箱処理剤を有効活用し病気にかからない稲づくりをしましょう

●苗いもち防除の徹底

今年度おばこ管内では葉いもちの発生は目立ちませんでした。しかし油断大敵です。病気にかかりにくい苗をつくるためにも箱処理剤を有効的に使用しましょう。「苗いもちなければ葉いもちなし」という言葉があるように育苗期の時点で防除を徹底することにより葉いもちにかかるリスクは減少します。箱処理剤は苗いもちには効果が期待できませんので、苗いもち防除のためベンレート水和剤を播種時～播種7日後まで、またはビームゾルを緑化始期に使用しましょう。

箱処理剤を使用すると長期間本田でのいもち病の感染を抑えることが出来る他、コストや防除回数の削減にもつながり省力化になります。しかし箱処理剤は剤によって使用時期が異なるため間違えてしまうと薬害の原因に繋がりますので使用方法をよく読んで適期散布をしましょう。箱処理剤は規定の量を苗箱に散布します。薬剤の量が不足してしまうといもち病を抑えることが難しくなりますので注意して使用しましょう。

※播種時にベンレート水和剤を使用しなかった場合は緑化始期に苗いもち病防除剤を必ず散布します。

※苗いもち防除と箱処理剤を組み合わせていもち病を予防しましょう。

苗いもち病防除剤

薬 剤 名	使用倍率	使用量	使用時期
ベンレート水和剤	500倍	500ml/箱	播種時～播種7日後まで
ビームゾル			緑化始期（ベタ張り除去後）

●施肥体系について

基肥重点肥料の施肥量が多い場合、悪天候が続くと窒素の溶解発現が遅れるため、籾・枝梗の黄化が遅れ穂いもちの発生が増加してしまいます。幼穂形成期には天候に合わせた生育調整ができる基肥量と今年の生育や収量に合わせた施肥量に調整して施肥体系を考えましょう。

●苗立枯病予防

今年度おばこ管内では、苗立枯病は少発生でした。次年度への対策として床土に焼土や人工培土を使用していない場合はタチガレエースM剤を使用して予防に努めましょう。

また閉めきったハウス内で、過かん水などによって育苗ハウス内が蒸れてしまうと、立枯病の発生を助長しますので適切な温度管理、水管理を行いましょう。

●もみ枯細菌病予防

立枯病と同様に発生は少なかったものの育苗巡回等で発生が散見されました。対策としては、テクリードCでの種子消毒や、イチバンによる育苗器具の消毒を行います。また、32℃を超えると発生が助長されるため、催芽・出芽温度は30℃以下とし、育苗ハウスではこまめに温度計を確認するなど適切な開閉管理を心がけましょう。

●プール育苗で省力化を

近年おばこ管内ではプール育苗に取り組んでいる方が増加しています。プール育苗を行うことにより水管理や温度管理作業が大幅に軽減されます。プールに水を入れる時期は、本葉が1葉期となった頃です。1回目の水の深さは育苗箱の床土の高さまでとし、苗が冠水しないように注意しましょう。2回目以降は、箱下に水がなくなる部分が現れたら入水し水の深さは育苗箱の床土から1cmまでとし、草丈の3分の1以上にしないようにしましょう。

●来年度に向けて 斑点米カメムシ対策をしましょう

今年度おばこ管内では、斑点米カメムシによる被害はみられましたが例年に比べて少なかったです。しかし、圃場巡回するとヒエ・ホタルイが多発している圃場が見られました。今一度次年度に向け雑草防除の徹底に努めましょう。ヒエ・ホタルイが圃場を覆い尽くしてしまうと米の品質低下・収量減少だけでなく斑点米カメムシの住処になってしまいその結果斑点米を劇的に増加させてしまいます。

特に今年度雑草の多かった圃場では来年も要注意です。初期剤＋一発剤を基本とし、徹底的に雑草防除しましょう。

●除草剤を効かせる環境づくり

除草剤の効果を最大限発揮させる圃場をつくりましょう。除草剤は散布後水により拡散し、その後3日ほどかけて田面に処理層を作り除草効果を発揮します。田面が露出してしまうと作られた処理層が壊れ効果を発揮しません。雪解け時に雪が残っているところは高い場所ですので切り土し、コンバインの旋回跡など深いところに埋めましょう。また、耕起・代かき作業は丁寧に行い田面の凸凹を無くし、均平に努めましょう。

圃場の水持ちもとても重要になります。代かきは荒代かき、植え代かきの2回かきをするなど丁寧に行い水持ちの良い圃場を作りましょう。また畦畔のネズミ穴などから漏水する場合があります。畦塗り機や畦マルチなどでしっかりと畦畔から漏水を防ぎましょう。

●自分の圃場にあった除草剤選び

除草剤には雑草によって得意不得意があります。自分の圃場にある雑草をよく見極め効果的な除草剤を選択しましょう。

草種別防除体系 例

雑草種類	初期剤	一発剤
ノビエ	メテオ ピラクロン シヨキニー豆つぶ	ベンケイ、ウィナー、カチボシ
コナギ		コメット、アップレZ、アクシズMX、カウントダウン
ホタルイ		ベンケイ、コメット、ウィナー
アゼナ		トップガンGT、アップレZ
オモダカ		コメット、カチボシ、アクシズMX

※一発剤は初期剤散布後7～10日後に散布しましょう

一発剤散布後に残草してしまった場合は中後期剤で追加防除を行いましょう

ヒエ剤	クリンチャー粒、EW	広葉剤	バサグラン粒、液剤
	ヒエクリーン粒、豆つぶ		
ヒエ・広葉	レプラス粒剤、クリンチャーバスME、ヒエクリーンバサグラン粒		
	アトトリ粒、フォローアップ粒、ワイドアタックSC（遅効性のため早めの散布）		

畦畔の除草と薬剤防除でカメムシを徹底防除

散布時期	薬 剤 名	希釈倍率/散布量 (10aあたり)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
出穂期 10日後頃	スタークル粉剤DL	3kg	収穫7日前まで	3回以内
	スタークル液剤10	1,000倍/60~150ℓ		
出穂期 24日後頃	キラップ粉剤DL	3~4kg	収穫14日前まで	2回以内
	キラップフロアブル	1,000~2,000倍/60~200ℓ		

※斑点米カメムシ類は地域全体となって防除を行う必要があります。おばこ一斉草刈りデーや共同防除などで適期作業に心がけましょう。